

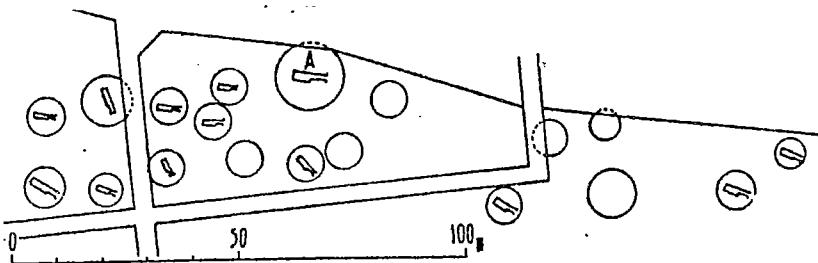
## 摂津国風土記散歩（補注編） 26

## “むくげ叢書”を目指して補注編

## — 西宮市域の渡来文化と関連遺跡 —

寺 岡 洋

摂津國武庫郡甲東村上ヶ原古墳群分布圖



1934年当時の上ヶ原古墳群の残存状況（『考古学』）

じつは、「むくげ叢書を目指して補注編」を書くのは2度目で、『むくげ通信』223号（2007年）にも書いています。今回、「むくげ叢書」を出すべく阪神間の渡来人に関連する遺跡や渡来系文物が出土する遺跡を紹介してきた「散歩」を読み直すと、人口50万の西宮市域がすっぽり抜け、これではアカンと書き足すことにしました。

## 武庫川西岸の渡来文化

## 関西学院大学構内古墳 西宮市指定史跡

関学のキャンバスが広がる上ヶ原（うえがはら）は武庫川の支流・仁川（にがわ）により形成された中位段丘で、標高は40～70m。かつては数十基の古墳群が存在したとも推測されている（『関西学院考古』31976年）。この上ヶ原古墳群でほぼ旧状をとどめる唯一の古墳が関学古墳。

場所は、関学の北端（仁川沿い）のゲストハウス（守衛さんの言によれば外人住宅）沿いの道を山側（西方向）へ行くと、金網に囲まれた古墳とぶつかる。周辺は整備中だった。

墳丘の直径約18m、横穴式石室の規模は現存長9.28mと大型。川原石を使い、持ち送りで石室を築いている。年代は6世紀後半～7世紀初頭。馬具も副葬されており、被葬者は地域の有力者（豪族）とみなされる。

## ○ 鉄滓（てっさい）・韓鍛冶（からかぬち）

副葬品について、『関西学院考古』にも、『西宮市史』（第七巻資料編4 1967年）にも挙げられてないが鉄滓（てっさい）が出土しており、渡来系鍛冶集団との関連で注目される。出典は、『長尾山の古墳群調査集報』（宝塚市教委 1980年）。鍛冶具の鑿（たがね）や鉄滓、さらに棺の座金具が出土したことで注目された長尾山の雲雀丘B1号墳の報告で紹介されている。

鉄滓は文字通りカスであり、タタラではカナクソと呼ばれるように、さしつめ産業廃棄物である。しかし、関学古墳では馬具や玉製品など装飾品と共に副葬されていたのは何故か？ 鉄製品を造る鍛冶技術の社会的評価が高く、鍛冶を象徴するモノとして鉄滓が古墳に納められたものと思われる。関学古墳の被葬者は鍛冶に関連した人物だったのであろう。

6世紀代の鍛冶は、韓鍛冶（からかぬち）と呼ばれた渡来系技術集団が担ったか、主流だったとされる。武庫川流域にも猪名川流域の若王寺（なこうじ）遺跡（尼崎市）ほどの大規模な鍛冶集落はなかったとしても、韓鍛冶の居住が推測できる。

## 仁川五ヶ山2号墳 西宮市指定史跡

関学古墳から仁川を渡り、北へ500mばかり住宅街・ハイキングコースを登ると、五ヶ山（ごかやま）古墳群が道端にある。現在、3基残っており、2・3号墳は小公園に、4号墳は五ヶ山遺跡公園（宝塚市）内に保存されている。かつては14基存在したらしい（合田茂伸「五ヶ山古墳群第1号墳および第2号墳出土の馬具」『西宮市立郷土資料館ニュース』第3号 1988年）。

山麓ではなく尾根上に古墳が並ぶ景観は珍しく、高靈（韓國慶尚南道）池山洞（チサンドン）古墳群を思い浮かべた。眼下には西摂平野が広がる。

2号墳は復原され、鍵の掛けた金網内に納まる。標高は140mとかなり高い。調査の際、下層からは弥生時代後期の住居跡も見つかっている。五ヶ山は弥生時代の高地性集落が有名である（『西宮市埋蔵文化財発掘調査報告書』2000年）。石室は埋め戻されている。

墳丘径は23.5m、横穴式石室は全長11m（推定）と大型。組合せ式の家形石棺が納められており、被葬者は武庫川流域では最高ランクの人物になる。古墳群の年代は上ヶ原古墳群より下り、7

世紀中葉。武庫郡司につながるのであろう。

副葬品には金銅製馬具のほか、銀製の空玉（うつろだま）が目につく。銀製空玉は渡来系文物に挙げられ、類例の少ない遺物であり、被葬者はこのような装飾品を手に入れるネットワークをもっていた人物・氏族であったのだろう。

### 具足塚古墳 西宮市高座（たかくら）町

関学正門前に戻り台地を南へ適当に下っていくと鶴（？）が群れてる新池の横に出た。新池の南の台地突端（標高32m）に具足塚（ぐそくづか）古墳が造られている。具足塚は個人のお宅の敷地内で、下の道路から見ただけだが、古墳周辺の庭が荒れている感じ。御手洗川（みてあらいがわ）を挟んだ向い（西側）には広田神社が鎮座し、こちらの台地は広田神社の旧鎮座地と伝えられる。

墳丘の直径は17m以上、石室の規模は8.75m。築造年代は6世紀後半と推定されている。

出土遺物は、馬具、鉄鋒（ほこ）、有鉢飾金具、金銅製空玉、用途不明鉄製品、それに須恵器など。

ここでも空玉が副葬されており、銅の表面に金を貼り付けたと説明されている。不明鉄製品にも金箔が付着するとあり、いわゆるキンピカの豪華な遺物が目につく（『具足塚発掘調査報告』西宮市教育委員会 1976年）。

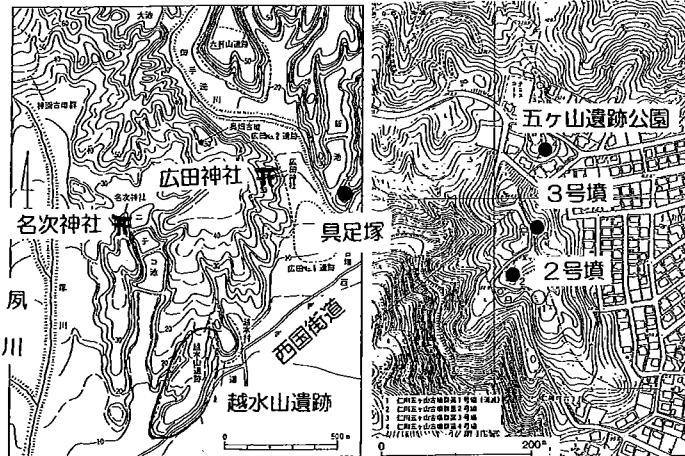
具足塚で特筆されるのは、ごく一部を除き盗掘を免れ、埋葬された木棺の痕跡が残り、須恵器も動いておらず、立ったままのものさえ見られる。

#### ○ 須恵器の打欠き儀礼について

具足塚の出土品は夙川河口の西宮市立郷土資料館に展示されており、展示される須恵器には一看して特徴がある。口縁部の欠けるものが目につくのである。バラバラに潰れて出土し、復原に際して破片が足りなかったのではなく、報告書の写真を見ても欠けた状態で副葬されている。人為的に打欠いたものようである。

須恵器の打欠きについては浅岡俊夫氏による考察がある（①「韓國古墳副葬品の脚台打ち欠き祭祀」『立命館大学考古学論集Ⅱ』2001年 ②「須恵器の口縁部・脚台部の打欠き儀礼」『田辺昭三先生 古稀記念論文集』2002年 他）。

周辺では郡家（ぐんげ）遺跡・住吉宮町遺跡（神戸市東灘区）、上脇遺跡（神戸市西区）などで類例が見られ、これらの遺跡はいずれもこの「散歩」シリーズに登場する渡来文化と関連する遺跡。



越水丘陵地形図

五ヶ山古墳群

浅岡氏は、弥生土器や古式土師器にも同様の事例が見られることなどから、汎東アジアに分布する土俗的祭祀とみなされた。

集成された事例には、池の上・古寺墳墓群（福岡県甘木市）のように渡来人一世の古墳群とみなせる例があり、列島の土俗とはつながらない。やはり、5世紀代に新しい焼物（須恵器）と共に持ち込まれた習俗、と考えるのが妥当なのではないかと思われる。郡家・住吉宮町・上脇遺跡なども渡来系集団との関係を強く示唆する。

須恵器の打欠き儀礼はミニチュア（小型）農工具を葬送儀礼に使用する事例を髣髴とさせる。ミニチュア農工具も列島の祭祀にも見られるが、新たに渡来集団により持ち込まれた習俗とされる。

具足塚の被葬者は葬送に際し、須恵器を打欠く習俗をもつ渡来系集団の首長あるいは渡来系集団と関係深い人物と推測可能であろう。

### 双室墳 八十塚古墳群苦楽園支群1・2号墳

#### — 苦楽園五番町古墳 大社中学校に移設 —

広田神社の西、阪急甲陽線沿いの大社（たいしゃ）中学へ。類例が少なく学術的価値が高いと評価され、移設された双室墳（そうしつふん）がグランド脇に保存されている。この古墳は西宮市教委が初めて体験した古墳の発掘調査だった由（『苦楽園五番町古墳』西宮市教育委員会 1966年）。金綱・鍵あり。名称が異なるが同じ古墳。

八十塚（やそづか）古墳群は六甲山前山山麓の芦屋・西宮市域に広がる群集墳で、現状では57基の古墳が確認されており、その大部分が横穴式石室をもつ。造営の開始は6世紀後半であるが、苦楽園支群は7世紀前半～中葉に造られており、終末期型群集墳とも呼ばれる。古代国家成立に平行

する時期の古墳群になる(『八十塚古墳群の研究』関西大学考古学研究室 2002年)。

双室墳を簡単に定義すれば、一つの墳丘に横穴式石室を二つ並列して造っている古墳。定義の仕方により小異あるが、類例は全国でも30例未満しかない。播磨・市川流域の見野(みの)古墳群で1基知られ、発掘調査されている。報告書の「集成」を見てみたい(『姫路市見野古墳群 発掘調査報告』立命館大学文学部 2011年)。

#### ○ 双室墳について

集成された双室墳は25例、時期は6世紀後葉～7世紀末までと長期間にわたる。特徴的な傾向として、大王(天皇)陵を除けば渡来系集団による築造と推定されるものが過半を占める。

竈形(かまとがた)土器の副葬、ドーム(穹窿きゅうりゅう)式石室で知られ、志賀漢人(しがのあやひと)の奥津城とされる近江の湖西に7基集中するのが注目される。他にも、百濟・南朝系とされる磚槨式(せんかくしき)石室の舞谷(まいだに)古墳群(大和宇陀郡)に2基、高句麗系とされる須曾蝦夷穴(すそえぞあな)古墳(能登)などで、丁寧に検討すればさらに増えるであろう。

苦楽園支群1・2号墳(苦楽園五番町古墳)の被葬者が渡来系氏族の一員であったかどうか確認できないが、可能性が考えられる。苦楽園支群の形成時期から、被葬者は古代国家形成期の初期官人(かんじん)の墓が想定され、初期官人には渡来系人物が登用されることが多いからである。

#### 越水山遺跡(西田公園) 西宮市西田町

阪急神戸線・夙川駅と西宮北口駅の間、線路沿いに万葉植物苑として親しまれる西田公園がある。西を夙川、東を御手洗川で区切られる越水(こしみず)丘陵の先端部で、越水丘陵には広田神社や名次(なつぎ・なすき)神社が鎮まる。具足塚から南西へ御手洗川を挟みおよそ1km強。

公園整備に伴い調査され、弥生時代の竪穴住居跡5基、古墳時代の竪穴住居跡3基などが見つかった。丘陵上は削平されておりさらに多くの竪穴住居が存在した集落跡と推定されている(『越水山遺跡発掘調査報告書』西宮市教育委員会 1990年)。古墳時代の集落跡の調査は少なく貴重な調査である。当時、この辺りは海岸線が丘陵近くまで迫っており、ムラでは土錘(網の重り)や飯蛸壺を使ってオカズを獲っていたようである。



双室墳 八十塚古墳群苦楽園支群1号墳・2号墳  
(苦楽園五番町古墳)

#### ○ 初期須恵器の出土 大壁(おおかべ)建物?

4号竪穴住居跡から出土した須恵器(すえき)の甕(かめ)は「中村編年(須恵器の型式による相対年代)I型式1～2段階にあたる」(p.76)とされ、実年代では5世紀前半になる。

この時期の須恵器はとくに初期須恵器と呼ばれ、朝鮮半島の陶質(とうしつ)土器の強い影響下にあり、列島ではまだ一般的ではない時期である。稀少な初期須恵器を入手できるネットワークをもつ家族・集団(渡来系である可能性が濃厚)が越水ムラの構成員にいたことを裏付ける。

その目で見ると、7号竪穴住居跡では周溝に柱跡が、大(直径18cm)・小(8cm前後)22本残り、「壁体と関係ある」とされる。もし土壁であれば外見は「大壁建物」そのものである。

大壁建物は渡来人の住居とされ、明石川流域の寒鳳(かんぶう)遺跡(神戸市西区)でも見つかっており、『播磨国風土記』に登場する「韓室(からむろ)」は大壁建物であると考えている。

#### 甲子園口遺跡(JR甲子園口駅周辺)

JR甲子園口駅から南側広場に面した一帯は弥生中期～古墳時代後期(6世紀前半)の遺跡で、現地表下約3m(標高約1～2m)が遺物包合層。この辺りも当時は海岸で漁具が出土する。

駅前の郵便局の発掘調査で、竈形(かまとがた)土器の口縁部、鍔(つば)が出土した(合田茂伸「甲子園口遺跡出土の須恵器と土師器」『西宮市立郷土資料館ニュース』第13号 1993年)。

竈形土器は持ち運べる竈(移動式竈)のこと、甕(こしき)・甕・鍋・釜などと炊飯具のセットになる。これらの土器は渡来人が持ち込んだ日常雑器で軟質土器とか韓式系(かんしきけい)土器と呼ばれ、渡来系住民の居住が推測される。

竈形土器を古墳に副葬する習俗は渡来系集団

のものとされ、葦屋漢人（あしやのあやひと）の墓域とされる三条・城山古墳群（芦屋市）でも見られる。甲子園ムラに対応する古墳群は不明であるが、竈形土器を副葬していたかもしれない（？）

### 広田神社・名次神社と武庫（務古）水門

広田神社は最近では阪神タイガースが優勝祈願に参拝する神社であり、奈良・平安時代には地震風雨に靈験あると広く信じられていたそうだ。

広田社は武庫（務古）水門（むこのみなど）に近く、海との関わりが強い。『日本書紀』の神功伝承では、務古水門に停泊した神功皇后が「広田国」で祭祀を行っている。また、新羅使節の入国に際しては生田（いくた）社・長田社などと共に敏壳（みぬめ）崎で神酒を支給する儀礼にも関わっている。

広田の地名は、『和名抄』にも「摂津国武庫郡廣田（比呂多）」とあり、『日本書紀』の原資料が記録された7世紀代まで遡れる古い地名になる。

#### 百済系広田連（ひろたのむらじ）の居住地

広田といえば、百済系の広田連がまず浮かぶ。『続日本紀』天平宝字二年（758）条に、「辛男床（からのをどこ）等十六人に姓（かばね）を広田連と賜ふ」という記事があり、『新撰姓氏録』の「広田連」を見ると、左京諸蕃（渡来系氏族）に「百済國の人、辛臣君（しんしんくん）自（よ）り出（い）づ」と記され、先祖は百済人である。

辛男床の本貫（本籍）は平城京左京で摂津ではないが、改姓に際して本拠地の地名を探ることが多くみられ、由緒ある地名である広田を名乗ったのではないか、と推測する説が多い。

私も広田連男床の経歴から「広田説」を補強したい。彼は天平宝字五年、遣唐使船を造るため安芸国に派遣され、七年には木工助（こたくみのつかさ 木工寮（もくのりょう）の次官）に任命されている。この職掌は造船や建築に明るくなければ就けない現業部門で、猪名部（いなべ）と似た性格の氏族である。水運・造船の武庫水門に近い広田の地が本拠であった可能性が高い、と考えられる。

名次神社は百済人の產土神を祀ったか？

ナスキ→ナツキ→ナツギ

式内社の名次神社は西田公園（越水遺跡）の北1kmばかり、ニテコ池の傍らに祀られるが、場所がよくなく本来の社地ではないようである。

社名の訓み方だが、延喜式神明帳では「ナツキ」、現在は社名も町名も「ナツギ」と呼んでいる。万葉集では「ナスギ」と濁って訓むようだが、本来は「風土記」や「日本書紀」のように「次」は「スキ」と訓み、「ナスキ」と訓むのであろう。

『播磨国風土記』神前郡（かむさきのこほり）多駄里（ただのさと）に記される「新次社（にひすきのやしろ）」には阿遲須伎高日古尼命（あじすきたかひこねのみこと）が祀られており、社名のニヒスキ、神名のアジスキのスキは百濟語の「スキ・村」だと考証されている（長田夏樹「風土記、朝鮮語起源地名考一百濟語スキ・新羅語ツキについて」『歴史と神戸』153 神戸史学会 1989年）。白村江（はくすきのえ）の村（すき）である。

越水丘陵に祀られた名次社は、本来は百済人が開拓した「ナ村」の産土神（うぶすながみ）ではなかつたか、と考えられる。ナは奈良のナ、奴国（ナ）のナ（土地の意）であろう。もし、この説が成り立てば、百済系の広田連の本拠地が武庫郡広田郷であつたことをさらに補強できる。

牟古首（むこのおびと） 牟古吉士（むこのきし）？

武庫川流域には百済系の牟古首もいた。『新撰姓氏録』（摂津国諸蕃百済）に、先祖は「百済國の人、汗汜（かんし）吉志（きし）」と記され、やはり牟古という地名を氏名（うじな）にしたのであろう。この吉志（きし）は、難波津で大きな勢力をもつた吉士集団の一派だと考えられている。

吉士集団は加耶系の渡来系氏族を中心とし、ヤマト王権の外交を担ったとされる。広田社の祭祀には、任那（みまな）問題をめぐり新羅との交渉に当たった吉士集団・牟古首（牟古吉士？）も祭祀に参加したのではないかと想像される。

武庫（務古）水門（むこのみなど）の比定地

武庫水門といえばまず猪名部であるが、猪名部については既に猪名川流域で触れている。

武庫水門の比定地だが、今まで遺構としては確認されてないが、手がかりとして藤原宮出土木簡（もっかん）の「津刀里津守連」がある。

津刀里（つとのさと）は、『和名抄』の武庫郡津門（つと）郷で、西宮戎社などがある海岸地域。津門里に住吉津の管掌者であり住吉社を祀った氏族・津守連（つもりのむらじ）がいたことは、ヤマト王権の重要な港津の存在を裏付けるもので、武庫水門も津門里周辺にあった可能性が考えられる。